

「論理」からはみ出していく「現実」

入不二基義

精神分析家のジャック・ラカンは、「論理的時間と予期される確実性の断言」(『エクリ I』弘文堂所収、佐々木孝次訳)において、「三人の囚人」のパズルを提示している。それは、おおむね次のようなものである。

三人の囚人を集めて、刑務所の所長がある命令を告げる。「ここに円盤が全部で五枚ある。白が三枚で黒が二枚である。この中から三枚を選んで、各人の背中に一枚ずつ貼り付ける。三人とも、自分の円盤の色は見えないが、他の二人の円盤の色は見える。相談をしたり鏡を見たりすることなく、自分の円盤の色を推理せよ。そして、正しく推理できた者は、すぐに部屋から走って出て行って、その推理を報告せよ。あてずっぽうの答えではだめだ。最初に答えることができた者は、釈放してやる。」

その結果どうなったか。三人の囚人は、しばらく黙って考える。誰も走り出さない。しかしそのあと、三人はいっせいに走り出そうとして躊躇するけれども、結局部屋から走って出て行き、同じ推理を述べることになる。そして、三人とも釈放される……。ラカンは、この結果に至るプロセスを、現実・想像・象徴の三界を思わせる仕方で説明する。三人をA・B・Cとして、Aの身になって次のように考えてみよう。

(1) 白が三枚で黒が二枚なのだから、三人の円盤の色の組み合わせは、「黒・黒・白」「黒・白・白」「白・白・白」の三通りしかない。しかし、Bは白、Cは白であると現に見えているので、「黒・黒・白」はありえない。したがって、「黒・白・白」の組み合わせか、「白・白・白」の組み合わせのどちらかである。前者ならば私(A)は「黒」であり、後者ならば私(A)は「白」である。しかし、どちらであるかは決定できない。

(2) 仮に、私(A)が「黒」であるとしてみよう。その場合には、Bは「黒(A)・白(C)」

を見ていることになる。そこで B は考えるだろう。「私 (B) は黒なのか、白なのか。仮に私 (B) が「黒」であるとする、C には二つの黒が見えていることになる。黒は二枚しかないのだから、C は自分の円盤が「白」だと即座に答えることができるはずである。にもかかわらず、C は走り出していない。ということは、私 (B) は「黒」ではなく「白」なのだ」と。C もまた同じ推理を経て、「B が走り出していないということは、私 (C) は「黒」ではなく「白」なのだ」と考えるだろう。

(3) このように推理して、B や C は「自分は白だ」という「答え」を告げるために走り出すはずである。にもかかわらず、B や C は走り出していない。ということは、最初の仮定（私 (A) が「黒」である）が間違っているのだ。したがって、私 (A) は「黒」ではない。すなわち、「白」だ。結局、私 (A) も他の二人 (B と C) も、みんな同じように「白・白」を目撃しているのであり、円盤の色は「白・白・白」という組み合わせなのである。

このパズルは、純粋に論理だけで考えようとする、ほんとうは「答え」に到達できない。すなわち、論理の枠内だけでは、三人の囚人は誰も、自分が「白」であるという決定的な根拠など持つことはできない。「黒」か「白」のどちらであるか分からないという「無知」は、三人全員に平等に分配されており、論理によって除去することなどできない。

にもかかわらず、三人は「答え」に到達する。なぜだろうか。それは、論理の外側の現実を、推理の中へと組み込もうとする（が組み込みきれない）ことを通じて、「答え」へとジャンプしているからである。

論理的な観点から見ると、「誰も走り出さないからこそ「白だ」と推理できることによって、みんなが走り出す」という事態は、矛盾である。「走り出さない」と「走り出す」ことは、矛盾するのではないだろうか。あるいは、「走り出す」ならば、「白だ」という推理が成り立たなくなるし、「白だ」という推理が成り立つならば、「走り出さない」でなけ

ればならないのではないか。

しかし「矛盾」は、現実においては回避される。論理の外側の現実、すなわち時間差（時間経過）が入り込んでくるからである。最初の「走り出さない」と二番目の「走り出す」のあいだには、時間差（時間経過）があるので、矛盾しない。「走り出さず、その後、走り出す」ことは何ら矛盾ではない。さらに正確に言えば、「走り出さないことを根拠に、走り出そうとすること。それが矛盾を招きそうになって（＝根拠を瓦解させそうになって）、躊躇の瞬間がみんなに訪れる。そして、その瞬間の同時到来に背中を押されて、再び走り出す」。こうして、時間差（時間経過）が「矛盾」をなし崩しにする。

あるいはまた、論理的な可能性としては、私（A）が（「白」ではなく）「黒」であっても、BとC二人のあいだで、（私（A）が「白」である場合と）まったく同じこと（逡巡と先走り）が生じうる。BとCはお互いに、「私が黒ならば、相手は自分の色が白だとすぐに分かるはずなのに、走り出していない。だから私は白なのだ！」と推理して、走り出そうとする。しかし、相手も同時に走り出そうとするのを見て、一瞬躊躇する。ほんとうは私が黒だからこそ、相手は答えが分かったのではないか？しかし次の瞬間、相手も同じように躊躇するのを見て、「同じように躊躇するということは、二人とも同じく白だからだ」と考えて、再び走り出す。私（A）が「白」であろうと「黒」であろうと、このような事態は生じうる。ということは、BやCの推理や行動と、私（A）が「黒」であるか「白」であるかは、論理的には独立だということである。そして、この点に関して、A・B・Cすべてのポジションが平等である。すなわち、AやBの推理や行動と、Cが「黒」であるか「白」であるかは、論理的には独立であるし、またAやCの推理や行動と、Bが「黒」であるか「白」であるかも、論理的には独立である。したがって、三人は他の二人を見ることによっては、自分が「黒」であるか「白」であるかを、論理的には導き出せない。

ところが実際には、私（A）の推理自体が、すでに中立的（論理的）ではなくて、BやC

の推理・行動の内側に巻き込まれている。それゆえ推理は先走り、そのことが「答え」を先取りの構成してしまう。全員の推理・行動が、全員の推理・行動の内側にすでにもう巻き込まれていて、そのことによって、「答え」へのジャンプが可能になる。

「中立性（論理）」からの逸脱は、(1) → (2) ですでに起こっている。(2) の段階の「想像」へと入るためには、論理の平等性（中立性）を破るような特権化が、まず働いていなければならない。A を選び出し、そいつを「私」にすること（特権的な自己同一化）が、それである。「無知」を背負いつつも、その「無知」を想像的に塞ごうとする「私」（特権的なポジション）を立ち上げなければ、「答え」への接近自体が始まらない。もちろん「私」は、「釈放されたい」という欲望に強く突き動かされている。その後の推理は、この特権的なポジション（私）の想像世界の中で進行する。B や C は、とりあえず「私」の想像世界の内部に位置する駒にすぎない。

しかし、それにもかかわらず、B や C は、「私」の盲点（円盤の色）が見える者として、設定される。「私」の想像世界の内部でも、その内部にないものを見る者として登場する。こうして、「私」という特権的なポジションは、B や C にも想像的に委譲されることになり、B や C もそれぞれ（単なる駒ではなくて）「私」として機能する。

ここで起こっているのは、（純粋な論理からはみ出す）特権的な「私」の導入と、そのポジションの想像的な移動—特権の不完全な平準化（擬似的な論理化）—である。この「論理からはみ出し」と「論理への不完全な回収」は、それ自体が拡張された「論理」の水準である。論理をはみ出すものも論理の内で飼い慣らそうとすること、これが「想像」である。

しかしさらに、この「想像」からはみ出す「現実」があつて、齟齬が生じる。すなわち、想像上は「走り出す」はずなのに、現実には「走り出さ」ない。（B や C が）「私は白だ」と断言できるかのように思われた想像世界と、B や C が黙って立ちつくす現実とがぶつか。そこで、私（A）の「想像」は、さらにそのはみ出した「現実」をも取り込んで拡張す

る。「現実」を取り込んだ「想像」は、私（A）の「現実」（白）を示唆する。

私（A）は、その示唆された「答え」に飛びついて走り出す。しかし、その走り出すという「現実」は、同様にBやCにも生じる。こうして、拡張した「想像」は一瞬麻痺する。みんながいっせいに走り出すという「現実」は、私（A）の「拡張した想像」をもはみ出すからである。

このようにして、「はみ出す現実」は、そのはみ出し方において三人のあいだで同期する。つまり、三人とも走り出し、一瞬立ち止まり、再び同時に走り出す。この同期こそが、「平等な欠損状況」を、すなわち「ことばの世界」を可能にする。「想像」内に収めきれなかった「現実」も、「ことばの世界」の内へと回収される。これこそが、最後の「みんな同じく白だ」の段階である。

しかしなお、「現実」は、「論理」や「想像」や「ことばの世界」へと完全に回収されてしまうわけではない。たとえば、刑務所に収監されてしまっているという始まりの「現実」、釈放を欲望するという駆動力としての「現実」。あるいは、考えている最中にも時間が経過してしまうという「現実」。そのような「現実」は、この話の内側（論理や想像やことばの世界）に組み込めないことによってこそ、この話を支えている。

（本稿は、『足の裏に影はあるか？ないか？—哲学随想—』（朝日出版社）所収の「あるパズル」の続編として意図されている。）